会津150年人物伝

戊辰戦争とその後の復興に尽力した

会津の先人たち

激動の幕末にかけて未来のため
意欲と情熱を持ち続けた先人たち

かつて東北屈指の雄藩と謳われた会津藩。
戊辰戦争という義を貫いた戦いに敗れ、それでも立ち上がり
未来へ向かって歩んできた会津若松市。
その歴史の中には、会津に生きた数々の先人の姿がありました。

幕末～戊辰戦争を戦い、会津を守った先人たち

松平 容保

まつだいら　かたもり

天保6年～明治26年（1835～1893）

会津藩第九代藩主 京都守護職

尾張藩の支藩である美濃高須（海津市海津町）藩主松平義建の六男として江戸四谷の藩邸で生まれた。幼名は銈之允。芳山、祐堂の号がある。十二歳で会津藩主松平容敬の養子となる。容敬は水戸の所生で、実父義建の実兄にあたる人であった。また長兄の慶勝は尾張藩主であり、弟の定敬は桑名藩主である。十八歳で会津藩主となり、文久二年（一八六二）新設の京都守護職となって京都へのぼった（二十八歳）。職務に精励して孝明天皇の信頼を得、緋の御衣を与えられ、また八月十八日の政変後には宸翰と和歌を与えられている。しかし、孝明天皇が亡くなり翌年の大政奉還にともない京都守護職も廃止となった。鳥羽伏見の戦いで旧幕府軍が敗れたため江戸に移り、さらに二月には会津に帰って来た。

降伏開城し滅藩となり死一等を減じられる

家督を養子喜徳に譲るが実権は容保が握り戊辰戦争の指揮をとった。奥羽越列藩同盟なども結成されたが、近隣の藩が次々と新政府軍に降伏し、九月二十二日、会津藩もついに降伏開城したのである。容保父子は東京に送還されて滅藩となるが、死一等を減じられて鳥取池田邸にて謹慎し、ついで和歌山藩邸（いずれも東京）に移される。明治二年容保の実子慶三郎（後の容大）が誕生し家名の再興が許され、斗南藩ができる。

北辺の地に三万石が与えられるが、実収は七千石にも満たなく旧家臣たちは筆舌に尽くしがたい苦難の生活を強いられたのである。

蟄居が解かれたのち日光東照宮宮司に

容保の謹慎が解かれたのは同五年のことで、その後は日光東照宮の宮司となり（祢宜は保科近悳）、同二十六年十二月、東京の小石川の自邸において没した。五十九歳。東京の浄土宗正受院に葬ったが神式であり、忠誠霊神という。大正六年六月、戊辰殉難者五十年祭にあたり、容保はじめ八柱が会津若松市院内の松平家廟所に改葬された。その中には容敬の養女で容保の義姉照姫の遺骨もあったという。

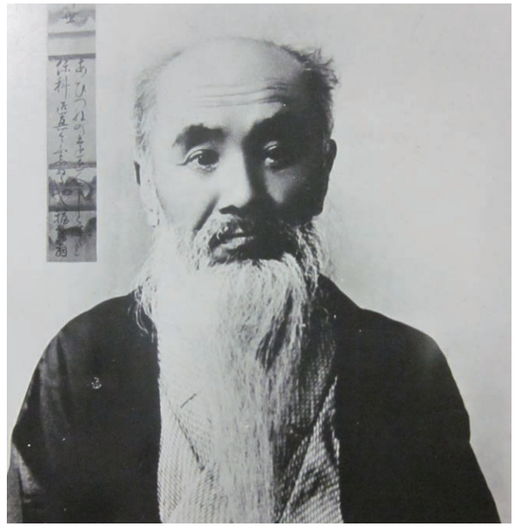
容保には『芳山公和歌集』という歌集がある。「会津会々報」に誰かが連載し、誰かがまとめたもので、いま編者は特定できない。それには計二三九四首の容保の自作の和歌が載っている。江戸時代の大名でこれほど多くの歌を残した人物は、武人であるより先に文人であった。その作を一首だけ引く。

風なくておのれと落る落栗の
音もしづかにくるる庭かな

西郷 頼母

さいごう　たのも

文政13年～明治36年（1830～1903）



幕末の会津を支えた会津藩筆頭家老

名は近悳。汝玉、あるいは栖雲、八握髯翁などと号した。維新後は保科近悳と改める。二十二歳の年に飯沼一孝の次女千恵子（十七歳）を娶る。

安政四年（一八五七）二十八歳で父近思が病のため家禄千七百石を継ぎ、三十三の年に家老となる。この年藩主容保が京都守護職に就任するのを、田中土佐と共に反対し、就任後も辞任することを強く進言した。このため「御免御叱」にて家老を免職となって長原村で蟄居となる。

慶応四年（一八六八）家老に復帰して白河口の総督となって出陣するが、白河城は落城し、敗退して若松城にもどる。この頃、君命によって城を出、米沢を経て仙台に至る。ここから開陽丸で蝦夷地に渡り、鷲ノ木港に上陸、旧幕府（榎本）軍の「役員外江差詰」となる。しかし、翌年に榎本軍は降伏し、頼母は東京へ護送の後、館林藩や東京の増上寺玄城寮で謹慎生活をおくる。

容保の日光東照宮宮司就任にともないふたたび旧主のもとへ

明治五年（一八七二）伊豆那賀郡中川村で謹申学舎を開いてその学長となるが、同七年閉舎。同八年八月、東白川郡棚倉の都々古別神社の宮司に就任。けれども同十一年、西郷隆盛の反乱にくみした疑いで同宮司を解任となる。同十三年二月、旧主松平容保が日光東照宮の宮司に就任したのにともない、頼母はその下で祢宜をつとめる。同二十年に東照宮の祢宜を辞し、会津若松に足を踏み入れる。そしてかつての邸宅の跡を訪ね、

桑の田と変りしやどの庭の松
薪となりて一枝だになし

と詠んでいる。同二十年、五十八歳となって旧藩士伊与田喜兵衛の長女きみ（四十歳）を妻とする。同二十二年戊辰戦争戦没者招魂祭を開いてその祭主となる。ついでこの年、霊山神社（福島県伊達郡）宮司となる。同二十三年妻と離婚。

同三十二年、七十歳を迎えた頼母は霊山神社の宮司を依願退職して若松に帰り、十軒長屋（会津若松市東栄町）に居を定める。これを機会に青森県上北郡四和町大字伝法寺より若松市栄町に転籍する。

同三十六年四月二十八日、同所において没す、七十四歳。法号は栖雲院殿八握髯翁大居士。遺言により菩提寺である善竜寺に葬る。

会津嶺のをちこち人に知らせてよ
保科近悳けふ死ぬるなり

これが辞世の歌であったという。

萱野 権兵衛

かやの　ごんべえ

天保元年～明治2年（1830～1869）

藩主を守り、義に生きた名家老

名は長修。通称は初め恒治。権兵衛長裕の長男。若くして学問、武芸を修めて人望があり、性格はきわめて温和であった。藩主容保が京都守護職時代は会津にあって、政務にたずさわっていた。慶応元年（一八六五）に家老となり、戊辰戦争の際は包囲された若松城の外あって城内に兵糧を送り、また各地で転戦した。入城して戦うことを望んでいた中野竹子らが従軍を願いでたが、「婦女しまで狩り出して戦ったとあっては会津藩の名折れ！」そう言って断った。しかし、古屋作左衛門が率いる衝鋒隊を紹介してくれた。

藩の戦争責任を一身に負って切腹

会津藩が降伏後は、喜徳（容保の養子）に従って東京の久留米藩邸に謹慎生活を送る。権兵衛は終日端座して膝をくずすこともなかった。新政府の軍務局から容保父子を助命するかわりに戦争の責任者三名を要求してきたのだった。このとき、家老の席次からすれば権兵衛は四番目であったが、上席の西郷頼母は当時行方不明、田中土佐、神保内蔵助の両人はすでに切腹していた。そのため一藩の責任を一身に負って切腹することとなった。

明治二年五月十八日、東京広尾の保科邸（会津藩と縁戚）に入ると、当時、一刀流溝口派の師範樋口隼之助が行方不明であったため、その秘伝の絶えるのを恐れて竹の火箸を使って井深宅右衛門にこれを伝えた。権兵衛の辞世らしい詩歌は残っていないところを見ると、余程この方は不得手であったようだ。やがて時刻となり権兵衛は従容として見事な切腹を遂げた。この介錯をつとめたのは、飯野藩の使い手沢田武司であった。切腹に先だって祐堂（容保の隠居名）と照姫から本人あてに親書が届けられていた。照姫は「……全く御二方様御身代りと存じ……言語に絶し、惜しみ候……」といい、権兵衛殿へとして次の歌が添えられていた。

夢うつゝ思ひも分ず惜しむぞよ
まことある名は世に残れども

新政府の軍務局から屍体は保科家で処理せよ、と達しがあったので、権兵衛の遺志により棺は浅黄の木綿で包み、貨物のようにして芝白金の興禅寺に運び、ここに葬った。なお、権兵衛の墓は会津若松市の天寧寺にもあり、こちらはその法号と没年月日だけが刻んである。報国院殿公道了忠居士という。

歴史のひとコマ　若松市から「会津若松市」の誕生

市制・町村制度が敷かれて、郷土が福島県北会津郡若松町となったのは、明治22年（1889年）4月。初代町長には倉田作十郎がついた。さらに市制が敷かれて若松市となったのは明治32年4月のこと。戊辰戦後の明治九年に福島県と若松県、磐前県の三県が併合して現在の福島県が誕生したなかで、県内ではもっとも早い市制施行だった。これにより若松市は独立した地方自治体として運営されることになった。初代の市長は秋山清八である。市役所は大町一ノ町に置かれた。

このあとしばらく若松市の時代が続き、「会津」を冠した現在の会津若松市となったのは、近隣七村の編入合併が実現した昭和30年（1955）1月1日から。東西14km、南北23km、人口95,600人余、文字通り会津の中心都市が誕生した。この合併により、東山・芦ノ牧両温泉、飯盛山、背炙り山、猪苗代湖西岸などの観光資源が会津若松市に包括されることにもなった。

なお、このあと平成の大合併では平成16年に北会津郡北会津村、17年に河沼郡河東町を編入合併して今日に至っている。

梶原 平馬

かじわら　へいま

天保13年～明治22年（1842～1889）

重要職務遂行

会津藩士。天保十三年（一八四二）会津藩家老内藤介右衛門信順（二千二百石）の次男に生れた。会津藩名門の家柄である梶原健之助の養子となり、以後梶原姓となる。文久二年（一八六二）藩主松平容保が京都守護職を拝命すると、平馬は常にその側近として随従した。慶応元年には若年寄りに、翌二年には家老職に進み国事に奔走していたが、家老横山主税が亡くなった後には、藩外交の顔となり他藩や外国公使らとの交誼を結んだ。

慶応四年（一八六八）一月の鳥羽伏見の敗戦により、容保らが会津に帰国した後は、平馬を始めとする二十八名が江戸に残留し、横浜に赴きエドワード・スネルから小銃八百丁、並びに武器弾薬を買い付け、また、旧幕府の勘定方より資金調達して、大砲や様式銃等も購入し、新潟廻りで会津に持ち帰ることに成功している。

奥羽越列藩同盟に奔走

会津に帰藩した後には、庄内藩との同盟を実現させたほか奥羽越列藩同盟の結成に各藩の家老が仙台領白石に集合した際は、その陰にあって奔走し、籠城戦中は城内にあって内政を担当し容保を補佐した。やがて会津藩降伏の時になると、平馬も藩主父子と共に儀式に臨み、他の家老らと連署の上容保・喜徳の助命を嘆願した。そして、容保らに随従して東京で謹慎することになる。

明治二年には太政官より松平容保の実子・容大をもって家名再興が許されるが、この時の調整も平馬と山川大蔵（浩）が代表として行っている。会津藩は新たに斗南藩として再出発することになった。平馬も明治三年には謹慎が解かれ斗南に移住し、廃藩置県後は青森県庁に出仕したが、短期間で辞していてその後の消息はわかっていない。

妻二葉は平馬と離婚し、明治四年八月山川浩の一家と共に田部より東京に移住、一子景清を海軍軍医学校に入れて梶原家の家名を継がせた。平馬のその後の消息は不明であったが、近年平馬の墓が根室にあることが判明した。

歴史のひとコマ

鶴ヶ城の再建、悲願みのる

戊辰戦後、鶴ヶ城は明治7年（1874）に天守閣や角櫓、城門など城内すべての建物が取り壊され、石垣が残るだけだった。それから90年余、鶴ヶ城天守閣の再建が実現したのは昭和40年（1965）9月17日のこと。

再建には賛否両論があった。しかし、昭和32年の戊辰90年祭を機に再建の機運が盛り上がり、同39年に起工式を迎えた。やがて鉄筋コンクリート五階・地下一階の天守閣と、鉄骨造り一部木造平屋建ての走り長屋、鉄門がその偉容を現わすと、会津は大きく沸き返った。以来、再建された鶴ヶ城は一貫して観光会津のシンボルとしての役割を担い、一般公開から五百日余で入城者は100万人に達した。

周辺の整備も行われ、昭和42年には鶴ヶ城管理事務所が落成し、無料休憩所とトイレが設置された。平成に入っても、蒲生氏郷と千少庵の貴重な伝承を今に伝える茶室「麟閣」が、平成2年に本丸内に移築復元された。また、平成9年からの史跡若松城跡整備事業で「南走長屋」「干飯櫓」が復元落成。さらに平成二十三年春からは、幕末時代の「赤瓦」をまとった日本で唯一の天守閣にリニューアル。平成27年9月には鶴ヶ城天守閣再建五十周年を迎えるなどして、現在に至っている。

佐川 官兵衛

さがわ　かんべえ

天保2年～明治10年（1831～1877）

「鬼官兵衛」の異名をとった会津藩士

名は直清。幼名を勝といい、雅号は残月。幸右衛門直道の長男として、城下で生まれた。性格は直情的であるが信義に厚く、和歌を嗜んだ。戊辰戦争直前に組織された別選組の隊長に任命されて、鳥羽伏見戦争に出陣する。しかし隊員七十余名のうち銃器を持っている者は少なく、多くは刀槍を携えているに過ぎなかった。このため多くの死傷者を出し、官兵衛の刀は銃弾を受けて折れ、また眼を傷つけてしまった。淀城に退却するにあたっては陽光から眼をかばうため両天傘を左手でさし、右手で折れた刀を杖にして悠然と淀大橋を渡ったという。

越後方面に出陣し各地を転戦

若松に帰ると四月に朱雀四番士中隊の中隊頭（隊長）となって越後方面に出陣し、とくに片貝の戦いでは薩摩、大垣、長州軍などと接戦に及び、勝利している。けれども越後における戦況では四分六分で不利であったという。三条に布陣していたとき、藩主からの急使がきて若松城に戻ったのは八月九日のことである。ただちに四百石加増されて七百石の若年寄となり、ついで三百石加増の上、家老職に任命されたのである。こうした異例ともいえる加増は、佐川家の祖勘兵衛直成がもともと千石であったという家柄のせいでもあった。

八月二十九日の長命寺の戦いは激戦をきわめ、この出陣の総督を命じられた官兵衛以下、従った藩士たちはいずれも決死の覚悟で、めいめいがこの日「戦死」と書いて戒名とともに懐にしていた。このことは後に新政府軍側の記録によって明らかとなった。各地で転戦の後、田島在陣の官兵衛のもとに藩主容保からの親書がとどいたのは、九月二十四日のことである（二十二日に既に降伏していた）。ここに至って武装解除し塩川に謹慎していたところ、新政府から東京に呼び出されて訊問があった。

明治三年（一八七〇）斗南立藩とともに斗南の中市村に移住したが、同六年頃には若松に帰っていた。同七年旧会津藩士たちの生計の途をひらくため、かねて招かれていた警視庁に三百余人を率いて奉職し、みずからは大警部となった。同十年二月、西南戦争の際は豊後口警視隊の一番小隊長兼副指揮長として九州に渡る。三月十八日、熊本県阿蘇郡の二重峠付近において薩摩の青年隊と激戦に及び、身に銃弾をあびて戦死したのである。四十七歳。一子直諒は幼年学校を経て軍人となったが、日露戦争によって戦死している。

田中 土佐

たなか　とさ　〔玄清〕

文政3年～慶応4年（1820～1868）

田中家は田中正玄、玄宰といった名家老を輩出する家系で、土佐も家老を務めた。

松平容保が京都守護職を拝命する際、先遣隊として京都に入り、黒谷金戒光明寺を本営として手配し、容保の入京後も傍らでサポートした。

慶応四年（一八六八）、鳥羽伏見の戦いに破れ、会津に帰国。土佐は兵を率いて城下で戦ったが、外郭の一つ、六日町口門を守れずに敵の侵入を許し、家老、神保内蔵助とともに自刃した。

神保 内蔵助

じんぼ　くらのすけ

文化3年～慶応4年（1816～1868）

神保内蔵助は家老職を務め、松平容保の京都守護職拝命に従って上洛した。元治元年（一八六四）、禁門の変が勃発すると、天王山に立て籠もった長州藩の主戦派・真木和泉らを自刃させる功を立てた。

戊辰戦争では、城下に出て戦うが、外郭の一つ、六日町口門を守れずに敵の侵入を許し、家老、田中土佐とともに自刃した。

一瀬 要人

いちのせ　かなめ

天保2年～慶応4年（1831～1868）

一瀬要人は慶応二年、若年寄となる。

松平容保が京都守護職を拝命すると番頭として随行、慶応四年に家老に昇進した。

戊辰戦争では、越後方面の総督となり各地を転戦。戦いが城下に移ると要人は城外に出て戦った。

南方の熊倉の戦いで新政府軍を撃退したが、大激戦となった一ノ堰の戦いでは銃撃を受け負傷してしまう。九月二十二日桑原にて戦死。

横山 主税

よこやま　ちから　〔常守〕

弘化4年～慶応4年（1847～1868）

横山主税常守は横山主税常徳の養子で、常徳が元治元年（一八六四年）、病で亡くなると常守が家督を継ぎ、慶応三年、パリ万国博覧会の使節団としてヨーロッパ各国を歴訪した。

帰国後、戊辰戦争に参戦し、家老・西郷頼母の副総督として白河口の防衛にあたった。

慶応四年（一八六八）五月一日、新政府軍が白河城を包囲しようとすると、状況打破のため稲荷山に駆けつけたが銃撃を受け戦死。

中野 竹子

なかの　たけこ

未詳～慶応4年（～1868）

中野竹子は、江戸常勤の会津藩士中野家の長女として江戸に生まれる。非常に利発で武芸に通じていたと言われている。戊辰戦争が始まると江戸から会津に引き上げ米代の田母神家の書院を借りていた。

竹子を含む会津藩の女性らは、戦いが始まれば城内に入ることを申し合わせていたが、慶応四年（一八六八）八月二十三日、新政府軍があまりに早く城下に攻め入ってきたため、竹子は入城を果たせず、城外で集合できたのは母・こう子（孝子とも）、妹・優子ら六名であった。

六名は、照姫が坂下に立ち退いたという情報を得て向かうも、合流は出来ず、事実、照姫は城内に留まっていた。

翌日、越後方面から引き上げてきた萱野権兵衛のもとに赴いて従軍を申し出て、城下への進撃の際に同行を許可された。翌二十五日、城下北西の柳橋まで進んで新政府軍と激しく戦うも、一発の銃弾が竹子に命中、帰らぬ人となった。

敵方も評価する才覚の持ち主

神保 修理

じんぼ　しゅり

天保10年～慶応4年（1839～1868）

神保修理は天保十年（一八三九）に会津藩家老の神保内蔵助利孝の長子として生まれた。実名は神保長輝と言った。実弟には母方の家を継いだ北原雅長がいた。神保家は会津藩祖保科正之の代から続いた名家の一つで家禄は千二百石であった。修理は幼少の頃から学問に秀でており、藩校日新館で勉学に励んでいた時代には周囲から秀才と謳われていた。やがて成人となり、妻を娶ることになり、会津藩士井上丘隅の娘雪子と夫婦となった。

松平容保は神保修理の才覚を重視し、藩の重役に登用

会津藩主松平容保は神保修理の才覚を重視し、藩の重役に登用した。ほどなく、徳川幕府のたっての要望により、松平容保は動乱の京都を取り締まる為に置かれた京都守護職を拝命することになった。文久二年（一八六二）、修理は松平容保に随行して京都に赴き、軍事奉行添役として容保の側近くにあって国事に奔走した。

慶応二年（一八六六）、容保は修理の優れた国際感覚を買い、長崎に派遣した。長崎では、諸外国の事情を知るとともに西国藩士とも交友を深めた。慶応三年（一八六七）になると大政奉還、王政復古と続き、主戦論が高まる中において修理は将軍徳川慶喜に不戦論を進言したと言われている。

戊辰の年、慶応四年（一八六八）一月、戦いは避けられない状況になり、ついに鳥羽・伏見の戦いが勃発した。旧幕府軍は兵の数が約一万五千名、薩摩・長州・土佐軍は約五千名と数の上では圧倒的に旧幕府軍が有利と思われた。しかし、薩摩・長州・土佐軍は錦の旗をひるがえして官軍だとし旧幕府軍を賊軍だとした。このことにより、戦意を亡くした旧幕府軍は総崩れになってしまった。

敗戦の主因とされ悲運の最期を遂げる

戦況が不利になった後、神保修理は将軍徳川慶喜に戦いを続けることの非を説き、江戸に戻り恭順するよう進言した。朝敵になることを恐れた徳川慶喜は、急きょ会津藩主松平容保等と共に大坂から密かに海路で江戸に帰ってしまい、慶喜は江戸の寛永寺にて謹慎した。

旧幕府軍はじめ会津藩士の抗戦を主張する者たちは将軍徳川慶喜や会津藩主松平容保等が江戸に帰ってしまったのは神保修理の進言によると主張し、松平容保に修理の処断を強く迫った。遂に、神保修理は切腹を命じられ、慶応四年（一八六八）二月十三日、江戸の三田下屋敷にて自刃した。三十歳だった。東京都港区興善寺に墓がある。

辞世の和歌

帰り来ん時よと母の待ちしころ
はかなきたより聞くべかりけり

手代木 勝任〔直右衛門〕

てしろぎ　かつとう（すぐえもん）

文政9年～明治36年（1826～1904）

渉外担当で功績

会津藩士。文政九年（一八二六）佐々木源八秦道の長男に生れたが、佐々木の実兄の手代木又吉勝富の養子となり、通称を直右衛門勝任（すぐえもん・かつとう）と言った。藩主松平容保が京都守護職を拝命すると、手代木勝任もこれに従い上洛した。元治元年（一八六四）には会津藩公用人の任につき渉外担当となる。

公用人として京に赴任し連絡調整にあたる

会津藩士が誤って土佐藩士を殺害してしまった事件では、土佐藩側との折衝役を務めたほか、禁門の変の際には病身だった容保の名代で参内して、長州藩追討の勅を受けるなどし、慶応三年の大政奉還では事前に土佐藩の後藤象二郎と協議するなど、渉外担当として他藩との折衝ではその功績は大きかった。一方、新選組や所司代、町奉行を動かす立場にいて、攘夷派の浪士十数人を捕え、あるいは斬殺した。また、容保の代理人として参内し、将軍慶喜から賞賜を賜ったこともある。

やがて、慶応四年一月鳥羽伏見の戦いが始まると、手代木も会津に帰国し以後は奥羽越列藩同盟での諸藩との仲立ちに奔走し、戦線が会津に移り籠城戦が始まると、若年寄として前線に出て奮戦した。

開城時には秋月悌次郎と共に米沢に使者にたち、板垣退助らと協議し、九月二十二日の降伏開城を迎えた。

開城後は手代木も他の藩士たちと同様猪苗代に謹慎の後、因幡・高須・尾張各藩邸で幽閉されるに至る。明治五年には幽閉も解かれ明治新政府に奉職、香川県・高知県の権参事を歴任したほか、岡山県吏となり区長を務めた。

坂本龍馬・中岡慎太郎暗殺の実行犯と言われている佐々木只三郎は実弟で、京都見廻り組みを率いていたが、鳥羽・伏見の戦いで戦死した。

正六位勲六等に叙せられた。

明治三十六年六月三日、岡山市で病没。享年七十八歳

歴史のひとコマ

背炙り山に東北一の空中ケーブルカー誕生

「鶴ヶ城と白虎隊の歴史」を中心とした会津の観光が強く打ち出されるようになった中で、昭和31年（1956）8月には東山温泉地内に当時東北一のロープウェー、背炙り山空中ケーブルが開通。さらに4年後には、背炙り山関白平に夏・冬兼用のリフトが敷設された。「あさぎり」「ゆうぎり」と名付けられた二台のケーブルカーは、新しい背炙り山観光の目玉となった。

その背炙り山には昭和32年、日本女性でアメリカ移民の第一号となった少女おけいの墓が建立されている。また、空中ケーブル開通により展望台など施設の充実や、背炙り山の開発が着々と進められた。その背炙り山頂までは昭和46年に9,300メートルの道路が全線開通。これに伴って背炙り山空中ケーブルも時代の役目を終え、昭和60年に廃止されている。

町野 主水

まちの　もんど

天保10年～大正12年（1839～1923）

戊辰戦死者の埋葬に尽くす

町野主水は天保十（一八三九）年、代々会津藩の重臣であった町野家九代目の生まれ。戊辰戦役では松平容保に従って入京し、京都・蛤御門の戦い、のち魚沼郡小出島など越後方面の戦いで活躍した槍の達人として知られた。別名、町野源之助重安。越後の戦いで白虎隊士の弟久吉を失ったほか、会津藩の降伏時には主水の母や妻、姉、子供など一族八人が戦火を避ける中、会津坂下町の勝方寺の裏山で壮絶な自刃を遂げている。

そんな悲境下にあった町野主水だが、戊辰戦後は藩取締として会津藩の残務処理に当たる一方、伴百悦らと共に懸案だった会津藩戦死者の埋葬に奔走し、のちに戦死者の慰霊団体である公益財団法人会津弔霊義会の生みの親となった。会津藩の「義」を貫き、旧藩士を救済する中心的な役割も担った。

すなわち、戊辰戦争終結時の会津城下は凄絶悲惨な状況に置かれ、そのひとつが敗軍とはいえ戦陣に倒れた会津藩士のおびただしい数の遺体が城内外に野晒しのまま放置され、明治新政府の民政局が設置されても埋葬を許されなかった（最近になって明治元年十月、五百六十七名の遺体が埋葬されたという新史料が現れる）。町野主水らの粘り強い働きかけで、埋葬（改葬）が許されたのは、およそ半年後の明治二（一八六九）年二月から五月にかけてのこと。市内七日町の阿弥陀寺に一千二百八十一体が埋葬され、日新町の長命寺には百四十五体が眠っている。いずれも墓標として許されたのは「戦死墓」の三文字のみである。

このあと旧藩士の町野主水が初代会長となって、財団法人会津弔霊義会の設立を内務大臣に願い出たのは大正二（一九一三）年のこと。四年越しとなった大正六年三月二十九日に認可が下りて、現在の公益財団法人会津弔霊義会につながっている。

「彼こそが最後の会津武士」

それにしても町野主水には強烈なエピソードが残る。彼が亡くなったのは大正十二（一九二三）年六月九日、八十五歳だったが、自ら息子に遺言し、遺体をあの戊辰戦死者と同様に菰に包み、荒縄で縛り裸馬に曳かせて菩提寺の融通寺に埋葬したという。いかにも一徹な会津人らしい。直木賞作家の中村彰彦氏は「彼こそが最後の会津武士」（著書『その名は町野主水』）と評した。子孫も内外で活躍し、息子の町野武馬は東京で山川浩の書生、のちに張作霖の軍事顧問、近衛文麿のブレーン、吉田茂の後見人・御意見番となった。衆議院議員でもある。弟の町野重世（北会津郡長）は公益財団法人会津育英会の創立者である。

平成十八年六月に町野主水家顕彰会が発足し、一族の慰霊にあたっている。

伴 百悦

ばん　ひゃくえつ

文政10年～明治3年
（1827～1870）

自ら賤民となり改装方に 阿弥陀寺に千二百八十一体 長命寺百四十五体など

伴佐太郎宗忠五百石取りの長男。伴家は代々の鷹番匠である。

百悦が江戸勤番の折、道場での稽古で打たれて仮死状態になったことがあった。そのことがあってか悟りを開いて剣の達人になったといわれ、「釈迦」と渾名されていた。

戊辰戦争では、越後口の萱野右兵衛隊の副将、撤兵隊組頭として、朝日山、長岡の戦いに出陣した。後、朱雀隊寄合二番隊中隊頭を務める。長岡城陥落後、会津にもどり籠城戦で活躍した。

開城後、十月一日民政局が設置され、二日郭内外の遺体埋葬が通達された。会津藩士赤羽彦作らが三日より捜索・仮埋葬を行う。若松取締の町野主水らは、罪人塚への埋葬を、新政府軍務局に働きかけ阿弥陀寺・長命寺への埋葬許可を死力し、翌年二月より、改葬方に任じられた伴百悦らは、阿弥陀寺に千二百八十一体、長命寺百四十五体などの埋葬に尽力した。だが民政局監察方兼断獄頭取の久保村文四郎の嫌がらせは度を越し、全国で横行していたニセ金ニセ札つくりは会津でも行われていて、明治二年の容疑者逮捕はすさまじく、久保村はろくに調べもせずに斬首するという圧政に出たため、その残忍なやり方は、若松城下では知らぬ者はいないほどであった。

東松峠で会津人の無念を果す

七月十二日、越前福井へ帰藩することになった久保村の出発日を探り出した伴と高津仲三郎ら同志は、相はかり越後街道の東松峠にて待ち伏せし惨殺して、旧藩士への恥辱に無念の一撃を下したのであった。

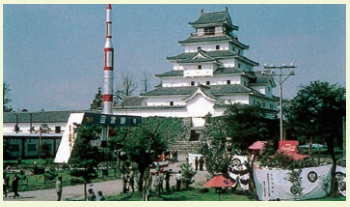
かくして伴は、越後方面に逃亡する身となり、大安寺村（新津市）の坂口津右衛門、医師晋斎方に身を寄せ、明治三年六月二十二日、大安寺村の慶雲庵にいるところを松村藩の捕吏に囲まれた。伴はひとりめの人を板戸越しに刺殺すると、自刃して果てた。村人は慶雲庵に埋葬し自然石の墓標を立てた。昭和四十一年三月、越後交通社長柏村毅（会津会会長）の手によって整備され墓碑も設けられた。

平成十一年十月、菩提寺善龍寺（会津若松市）に、「伴百悦墓碑」が建立され、誌文に「会津藩戦死者二千三十二柱の遺体埋葬に心血を傾けた、度重なる決死の嘆願により漸く許可を得、自ら賤民となり改葬方として阿弥陀寺、長命寺他十六か所に礼を尽して埋葬した」と。

歴史のひとコマ

厳かに明治戊辰100年祭の記念式典

郷土会津が戊辰戦争の痛手から立ち上がり、100年という歳月を刻んだのは昭和42年（1967）のことだった。9月22日、秩父宮妃殿下を市民会館にお迎えして厳かな「明治戊辰100年祭記念式典」が挙行された。



この日は鐘の音や市のサイレンに合わせて、全市民が戊辰戦役以来の市の復興発展に尽力した先人の諸霊に黙とうを捧げた。記念式典においては、市の花にあおい（立ちあおい）の制定や決意を新たにする「戊辰100年の誓い」が発表された。また記念の第15回会津まつりは40万人の人出を記録した、と戊辰100年祭を特集した「市政だより」第254号は当時の盛り上がりを伝えている。記念事業では、鶴ヶ城本丸で開催された「会津博覧会」をはじめ、NHKのど自慢全国放送、「会津若松市史」の完結、「近代会津百年史」の刊行、文芸春秋文化講演会、京都で「会津の観光と物産展」開催と話題の多い一年だった。